

近畿地方を中心とした 弥生青銅器祭祀の転換

Conversion of Yayoi Bronze Ware Rituals in Kinki Region

吉田 広

YOSHIDA Hiroshi

はじめに

- ① 弥生時代中期青銅器文化の東西差
- ② 銅鐸祭祀の具体相
- ③ 銅鐸祭祀の転換
- ④ 弥生時代後期への青銅器の変化
- ⑤ 青銅器製作における鉄器

おわりに

【論文要旨】

日本列島に流入定着した青銅器は、北部九州では身に帯びることで所有者の威儀を高めるよう機能し、それが埋葬の場にも持ち込まれた。一方、中四国地方以東では、個人の身体から離れて高く掲げられるという用いられ方により、集団共有の祭器としての地位を占めるという東西差が当初から生じた。後者の近畿地方において、主たる青銅祭器の地位を占めたのが銅鐸である。唐古・鍵遺跡における銅鐸模倣品である銅鐸形土製品のあり方を検討してみると、弥生時代中期には、銅鐸が埋納される以前、人間が自然界を超越しようとする世界観のもと、集落内でも大型建物と銅鐸が不可分に結びついた青銅器祭祀が執行されていたことを窺えた。しかし、弥生時代後期には銅鐸模倣のあり方に变化があり、銅鐸生産を集落内で行いながらも、中期に行われていた銅鐸祭祀はもはや行われなくなった。さらに、銅鐸形土製品そして小銅鐸のあり方を列島の俯瞰検討してみると、銅鐸の祭器としてのあり方が、時期的・地域的段階差をもちつつ、後期には大きく転換していったことを明らかにし、青銅器生産体制の変化や、青銅器分布圏の縮小、小型青銅器の盛行拡散といった事象とも不可分に結びついた変化であったと結論づけた。なお、その変化を進めた一側面として、青銅器製作における鉄器使用といった、道具としての石・青銅・鉄のあり方という条件も考慮すべきことを提起した。

【キーワード】 青銅器祭祀, 近畿地方, 銅鐸, 銅鐸形土製品, 小銅鐸